

伝える

青木 裕次

「自分は果たして生徒達に何を伝えてきたのだろうか」と、退職してから考えることがよくあります。勿論、与えられた専門の教科についてはその内容を伝えてきましたが、それはほんの化学の基礎です。大学や専門学校に行つて役に立ったか、社会人になってからその知識を活用できたか、そしてその知識が彼等の人生にどのように深く関わっているか、日常生活の中でどれほど役立っているか、甚だ心許ない話です。理科の教師として採用されたのですから、しっかりと教科内容を伝えることは当然のことですが、教育者として生徒達と接するので、子ども達に人としての在り方をしっかりと伝えなければなりません。しかし、その事を考えると正に忸怩たる思いで、胸の震えを感じることがあります。今の年齢になつてもまだ、人間としての未熟さや至らなさを、考えの甘さや自分に対する厳しさのなさなど、数え上げればきりが無いほどの様々な欠点や不足があります。ましてや現職の時には、様々な仕事や雑事そして煩惱に振り回され、自分の在り様や来し方などを深く見詰めることもなく、生徒達に接してきたというのが偽りのないところで、今になって反省と慚愧の思いにかられるのです。

子 子ども達に人としての在り方をしっかりと伝えなければならぬのは、教師という立場だけのことではありません。子どもに対する大人という存在に問われる事だと思えます。

最近、子ども達の問題行動の多くが、脳の発達やホルモンの変化、身体の成長にもなった行動だということが、様々なデータを基にしてテレビで紹介されていました。その通りなのでしょうが、だからと言って子ども達の行動の全てが、そのまま良いとは限らないと思います。心の成長は偏に、意図するかしないかに拘わらず、子どもの

周りにいる大人達に委ねられています。何か不都合なことがあれば、すぐ体調不良と言う理由でその場を凌ごうとする人がいます。昔からそのような人がいたのでしょう。病気だから仕方がない。それが口実になっていますが、子どもに接する時もそんな言い訳で、人として論さなければならぬことを回避してしまっていることがある様な気がしてなりません。子どもですから悪意はないのですが、人としてのルールやマナーそして思い遣りなどは、小さな時からしっかりと伝えなければならぬと思うのです。それは、大人としての責任です。

子どもは家庭、学校、地域の中で途切れることなく生きています。これは、自然界にある全てのものに共通していることです。家の中の子どもと学校での子ども、街の中の子どもはすべて連続した時間の中にあります。子ども達の行動の起因には、学校だけではなく家庭や地域、社会の全てが関わっているのです。子ども達に何か問題が起きた時、学校関係者の責任が声高に取り沙汰されます。勿論、学校・教師の責任もあるでしょう。しかし子ども達がなす行動や考えは、学校だけで形成されるものではないのです。子ども達は、意識するかどうかは別にしても、親、教師、近隣の人達、そしてテレビなどのマスコミに登場する全ての大人達から何かを伝えられ身につけているのです。

友 達みたいなお友達がいますが、親は親なのです。教師は教師で友達ではないのです。子どもは母親を求め父親を求めています。同様に先生には先生、大人には大人としての存在を求めているのです。子ども達に何を伝えるか、全ての大人に問われていると思えます。

(元青森県立北斗高校校長)